日向薬事始め（その3）[1-3]
—延岡の医祖、渡邉正庵とその周辺—

山本　郁男*　宇佐見　則行*　井本　真澄*　岸　信行**

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences in Hyuga (Miyazaki) (Part 3)
- Shouan Watanabe, the Father of Medicine in Nobeoka and People around Him -

Ikuo YAMAMOTO* Noriyuki USAMI* Masumi IMOTO* and Nobuyuki KISHI**

Abstract

Shouan Watanabe (1613-1699) was one of the most famous men in the history of Hyuga (Nobeoka, Miyazaki). He was a physician during the Edo period, often called the father of medicine in Nobeoka. He was born in Nobeoka and studied both medicine and Jugaku in Kyoto.

After his return to Nobeoka, he practiced medicine and opened a private school for young people. Watanabe was ordered by Yasuzumi Arima, then leader of the Nobeoka-Han, to be a teacher for his son, Kiyozumi Arima. Watanabe had over one hundred students. He was not only a physician and teacher, but also a politician. His grave is still in Zenseiji temple in Yamashita-machi, Nobeoka, with writings by Jinsai Ito and Tougai Ito on it. This paper deals with Watanabe himself, the people around him, and the events of his life.

Key words：Shouan Watanabe, Father of medicine, Nobeoka, Jinsai Itoh, Edo period
キーワード：渡邉正庵、医祖、延岡、伊藤仁斎、江戸時代

はじめに

渡邉正庵(1631-1699)は寛永8年（1631）に延岡、大武町に生まれ、成人後京都に上り医学、儒学を修め、当時の藩主、有馬家三代の側医、侍医、師範として、重職にあったのみならず、延岡の医薬の頂点を極めた人物である。従って後世、延岡の医祖、郷土私学の祖としてあがめられている。しかし、単に医術にたけていたことからこの様な最高の賛辞がなげかけられたのであろうか。そこに京都に学んだ儒学者としての人間的魅力があり、自己規制の効いた大人物であったことが彼の生涯から推察される。よって時の藩主有馬康純（二代）によってその子永純（三代）の養育の役を与えられる。しかしそこにも決して自説を曲げない頑固さがあり、三代藩主、永純を諫めたため、退けられ晩年は日々の糧として薬を売ってしのいだとの記録も残っている。ここら辺りを中心に彼の生涯と彼に影響を与えた人物を時代的背景とともに浮き彫りにしてみたい。

時代的背景

1600年関ヶ原の戦いで西軍に勝利した徳川家康は1603年征夷大将軍となり、ここに天下統一がなされた。1615年事実上豊臣氏は滅亡し、その後264年間江戸時代が1868年まで続くことになる。

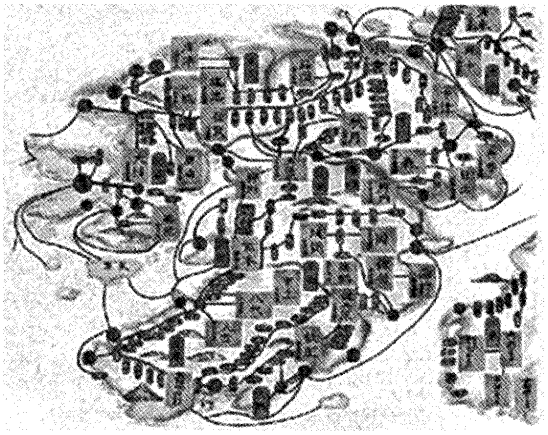
この論文の主役である渡邉正庵（せいあんともいう）が生きた寛永8年（1631）から元禄12年（1699）の約70年間は江戸時代を初期、中期、後期に分けると、その初期にあたる。初期は家康の江戸開幕から元禄期（17世紀末）までを指す。従って渡邉正庵の生きた時代は士農工商の四身分によ

*九州保健福祉大学薬学部衛生薬学講座　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
**北小路調剤薬局　〒882-0041　宮崎県延岡市北小路14-28
九州保健福祉大学 QOL研究機構　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
*Department of Hygienic Chemistry, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN
**Kitakoji Dispending Pharmacy, 14-28 Kitakoji, Nobeoka, Miyazaki 882-0041 JAPAN
Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

る幕藩体制における統括組織の市層性が完成され、中央集権的封建国家が築きあげられた時代といえる。対外的には寛永16年（1639）にポルトガル船の来航を禁止して鎖国としたことから、政治、経済（貨幣経済の発展）、文化（町人文化）、社会にも自ら独特の態様を形作ることとなった。特に文化において、世界観や倫理観に幕藩体制を維持確立に寄与した朱子学、陽明学、さらに国学がおこり、各派が林立した。渡邉正庵が師とした伊藤仁斎もまた国学の先覚の一人であった。すなわち学問発達の傾向は今まで武力で治めていた時代から文で治めるという文治主義、教化主義に変化したといえる。

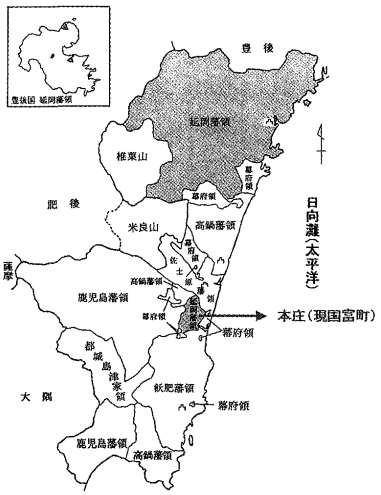
この変遷は当時の全人口のわずか7％に過ぎなかった武士が90％におよぶ全人民を支配するには必然的な結果であった。幕府は全国の約4分の1を領地とし、全国に200以上の諸藩大名を置いた。諸大名は武士を従え、農民に生産物（米など）を課し、貢租とし、藩を統括した時代でもあった。この時代の文とは主として前述の儒教であった。四代将軍家綱から五代将軍綱吉（元禄政治）の世は、新井白石の正徳の治が特に有名である。一方、医薬とのかかわりにおいて、この時代の対外関係は特に重要である。江戸幕府は豊臣秀吉とは異なり、親善的な対外政策をとり、ルソン、アンナン、シャム、カンボジアなどとの通商に朱印状を与えて貿易の統制を計った。家康は外国船の来航を許してイスパニア、ポルトガル、オランダ、イギリスの貿易船を優遇し、特にオランダ、イギリスには平戸に商館を開かせた。特記すべきは延岡藩の北隣に位置する豊後国(大分県)の海岸にオランダ商船リーフデ号の漂着という事件がこの東九州の地に大きな影響を与えた。当時、豊後国に延岡藩の飛び地があったことから海外文化の影響は無視できない。乗組員ヤン・ヨーステンとウィリアム・アダムスは日本にとどまって家康の外交顧問となった。キリスト教禁止政策の緩和により高山右近、大友宗臨といったキリシタン大名が出現したもののやがて宣教師が植民政策、領土的野心の手先と考えられるようになり、秀忠、家光の時代になって、禁教政策は強化され、平戸は閉じられついに長崎出島のみを唯一の対外的場とした。この時イギリスは手を引いたため出島に出入りしたのはオランダ人のみとなった。すなわち16世紀のスペイン、ポルトガルとのキリシタン伝道と南蛮貿易は上述のごとく鎖国を機として断たれた。したがって異国との交流はそれ以降オランダのみに限られた。

江戸前期のオランダ文化の影響は南蛮医学と紅毛医学と広範囲であった。長崎・出島のことは上記のごとく一部触れたが幕藩体制下の西国九州は如何ようであったのだろうか。天正18年（1590）秀吉の全国統一後、朝鮮侵略（文禄元年, 1592）もあり、九州の地は幕府にとっても注目の土地であった。つまりポルトガルからの鉄砲伝来（天文12年, 1543）以来、西欧との交流が最も激しかった地である。キリスト教の伝来、ザビエルの来日（天文18年, 1549）は特記すべきことであろう。先に戦国時代（15世紀末）には城下町の発達があり、九州の地でも福岡、熊本などが10万石以上の藩であり、延岡は7万石であった。江戸藩政の職制は将軍の下には大老、老中、若年寄があり、地方では老中の下に京都所司代、大阪城代、町奉行、遠国奉行さらに地方行政組織とし、天領（将軍直轄の領地）に郡代、代官がおかれた。西国は大阪城代の監察下にあった。延岡藩はいくつかの飛び地を持ち、近くにはいくつもの天領（豊後、本庄）があった。したがって延岡は豊後、高鍋や鹿児島との関係が濃かった。図－1は江戸中期の九州の地図である。

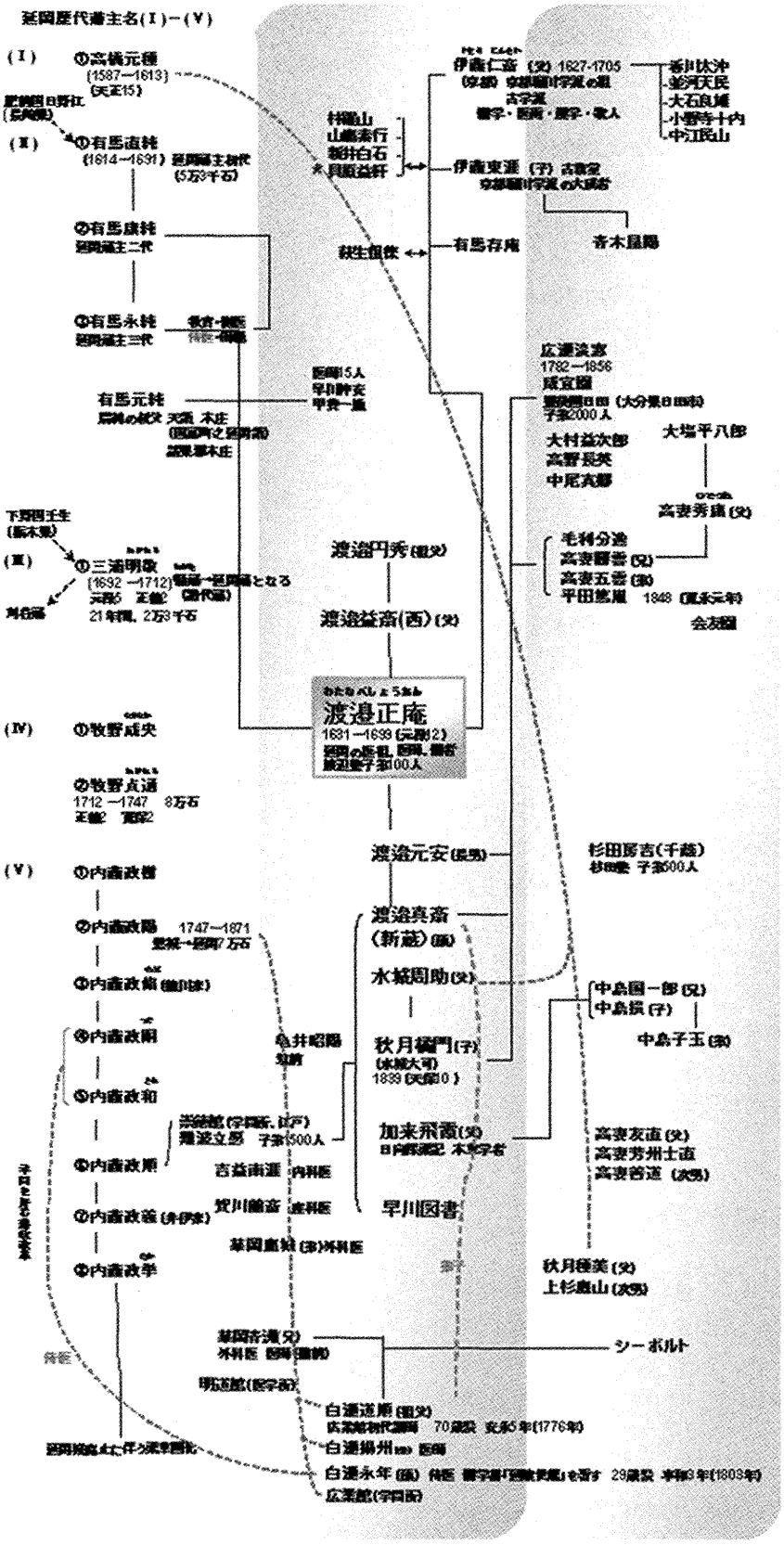


図－1　九州の地図（江戸中期）

この地図には小倉、中津、杵築、日出森、飫肥が記され、延岡がやや内陸にあるのが気にかかる。その他宇土、八代、人吉、唐津、佐賀の主要藩が見える。江戸幕府下の延岡は当初は県（あがた）と呼ばれていたが、初代の藩主は高橋元種（1587-1613, 天正15年 - 慶長18年）は初代で終わっているが、延岡城を築くとともに県北、県南あわせて5万石を治めていた。しかし、慶長18年（1613）罪人をかくまったことで突然改易され、延岡の城主が定まらない不幸な時代が続く。



図－2　江戸時代の延岡藩領



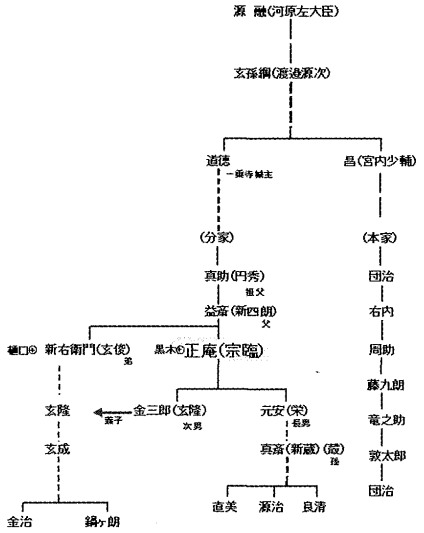
図－3　延岡歴代藩主と医薬関係人物
－渡邉正庵を中心として－

図－2に示すように江戸時代、遠く飛び地として本文中にも出てくる佐土原、飫肥、鹿児島藩に囲まれた本庄（現国富町）や豊後国の国東半島や数箇所にも延岡藩領があることがわかる。前述のごとく延岡歴代藩主は明治に入る前に高橋元種に始まり、有馬直純、康純、永純の三代から三浦明敬1代、牧野成央、貞通の2代をへて内藤家8代（1747-1871）へと続く。この約300年（1587－1871）の藩政時代に多くの医薬に関する人物が輩出した。中でも本論文中の渡邉正庵は有馬3代に使えた大人物である。図－3に渡邉正庵を中心とした延岡歴代藩主の医薬関係人物を示した。ここで藩政時代の医学と薬学のあらましをまとめて書くことにする。徳川前期－江戸時代（1615－）には、一応平和となり学問は復興し、宗教的にも一時的にしろ自由が与えられ医学は急速に進歩した。慶長11年（1606）、林道春（1583－1657）が李時珍の「本草綱目」52巻を入手、幕府に献上したことから我が国の本草学は急速に進展した。この拓本「江戸本草綱目」36巻が出版されたのは寛永14年（1637）のことであった。この6年前に渡邉正庵は生を受けている。また、後藤良山（1659－1733）や香川修徳（1683－1755）が輩出したのもこの頃である。さらに吉益東洞（1702－1773）、山脇東洋（1705－1762）らの名も見える。慶長17年（1615）頃の蘭学の勃興、元禄時代（1688－）に薬種が生まれ、江戸の本町、大阪の道修町は薬の町として隆盛をきわめ、延岡のような地方の城下町も小規模ながら薬種等は繁栄したものと考えられ、それに伴って医術、医師、薬師の活躍があったものと推察される。図－3にあるシーボルト（1796－1866）の来日は50年程下った。1824年のことで長崎には高野長英、伊藤玄朴、宇田川榕庵など多くの秀才が集まった。牛痘法は嘉永2年（1849）に日本に普及し始めた。

渡邉正庵の略歴とその周辺

渡邉正庵は寛永8年（1631）、延岡における富豪で町年寄でもあった渡邉益斎(西)の長男として大武町（現在の延岡市大武町）に生をうけた。元来、渡邉家はさかのぼれば源氏の血をうけた名門である。図－4に渡邉正庵家の略系を示す。

名は宗臨、字を道生という。通称金三郎と呼んだ。正庵はその号である。祖父にあたる渡邉円秀はこの地の豪族であった。土持氏に仕えていたが天正6年（1578）、土持氏が豊後（大分）の大友宗臨に滅ぼされたため、野に下り、つましく東海大武に住んでいた。ところが時代は



図－4　渡邉正庵家（分家）略系[4-5]

変わり、天正15年（1587）、高橋元種が城主となったことから渡邉家は再び脚光を浴びることとなった。円秀は仕官を断ったものの、東海清高島の統治をまかせられている。円秀の子が益斉であり、正庵（長男）は孫にあたる。正庵は幼にして沈思黙考型にして学問を好んだが故に弟の玄俊に町年寄をゆずり、彼独自の生涯を歩むことになる。元服後、京都に出て伊藤仁斎に学ぶと文献にあるが他の文献[6-7]とも読み合わせると実際に門人とはなっていないようである。数年後、延岡に戻って結婚、長男元安、次男金三郎をもうけるが、元安は成長して京都の伊藤仁斎とその子東涯に学んだことは確かである。おそらく正庵が後述のように京都に滞在中、伊藤仁斎にいたく私淑していたことから後世に誤認されたと思われる。幼時から神童といわれ学問を好んだ正庵は、京都では儒学と医学を修めた。この間のことは詳らかではない。当時の記録は絶無である。しかしながら伊藤仁斎にうけた影響は多いことから、ここで二人の師（仁斎、東涯）について述べておかねばならない。この理由は後述するが正庵の墓石の書と撰文にあたり書　伊藤仁斎、撰文伊藤東涯とあることから明らかであろう。伊藤仁斎は京都堀川学派の祖、図－3でもわかるように、その門弟にはそうそうたる人物がいる。たとえば、赤穂浪士の長、大石良雄をはじめ、小野寺十内もそうである。仁斎の子、東涯は正庵の子、元安とは友人関係にあったことから墓石の撰文を依頼したものと思われる[6]。

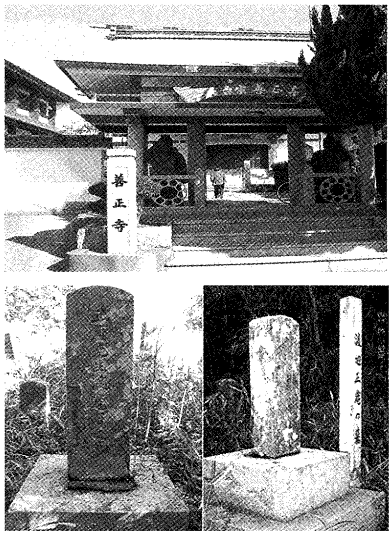
前述のごとく正庵は帰郷後、私塾を作り、子弟教育に励むと共に有馬家の教育、側医、侍医、師範をつとめた。しかしながら彼の身に一大事がおこったのは二代康純に

伊藤 仁斎像　　伊藤 東涯像

図－5　正庵の墓石の書、撰文した
伊藤仁斎、東涯父子の像[8]

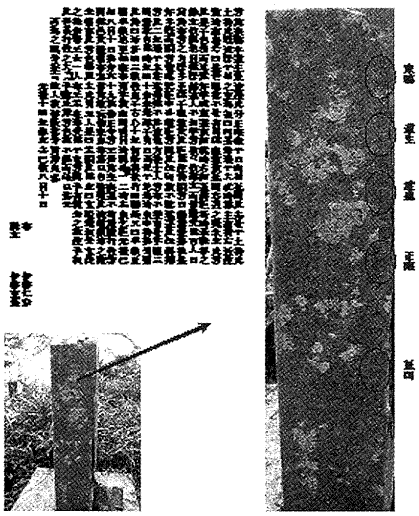
頼まれてその子永純（三代藩主）の養育係をおおせつかったことによる。永純は幼少時よりきかん坊でその行いはなはだ悪いことから、正庵はきつく永純に諫言したところ逆に怒りを買い、あろうことか藩主に逆らったということから、禁固を命ぜられ当時飛び地であった本庄（国富町）の永純の叔父（康純の弟）に預けられる身となった。この禁固はわずか2年ばかりであったが許しが出るも延岡では士人との交わりを禁じられたため、官を辞し子弟教育をするかたわら医術を貧民にほどこし、薬を売ってわずかばかりの代金を得、その日暮しの中で清貧に甘んじるも儒学者として一生をまっとうした。時に文禄12年（1699）享年69才であった。彼の墓は菩提寺である善正寺（図－6）（現在の延岡市山下町）、今山東麓の上野坊墓地にある[9]。

墓は正庵の長男、元康が元禄14年（1701）に建立、その正面に「正庵先生渡邉君の墓」とある。他三面の墓石撰文は石が花こう岩であるため風雨にもろく[10]、現在判読はむずかしくなっているが、文献によると次のようにかかれておりわずかながら宗臨、道生、渡邉正庵、延岡が読み取れる（図－7）。これを訳すると以下のようになる。「名は宗臨、字は道生、正庵はその号。京都の伊藤仁斎に学び、儒学と医学を修得。帰郷後、延岡にて時の藩主、有馬永純候に仕えたが、讒に遭うて禁錮せられ、郷里に退隠して子弟に教授。1699年元禄12年8月10日没。享年69才、延岡善正寺に葬る。」[6] 法名「心性院殿実蒼躰道正庵大位」であった。



図－6　善正寺正門と正庵の墓

中でも図－7には正庵の漢詩2編、「活計田三畝　義皇千古心　十年何所得　松竹四隣深」と「半畝丘圃半畝池　更無鹿事到茅茨　山間明月清風外　一二病夫耒乞医」[4,10-12] とある。元禄5年（1692）、正庵は子、元安が伊藤仁斎の門人となっていたことから、再び上京、京摂の温泉に逗留し、仁斎およびその東涯（図－5参照）に面会したという記録がある。これゆえに正庵は仁斎の弟子ということになったかもしれない。



図－7　渡邉正庵の墓石撰文[14]

そこで当時、延岡藩における学問の流れを記しておこう。渡邉正庵が学んだ儒学の系統は（一）復古学派と呼ばれ、伊藤仁斎と荻生徂徠の流れをくむ。正庵、元安、真斎と引き継がれ[7]、さらに白瀬道順、白瀬永年、白瀬炎郷、岩切孝哲（炎郷の弟）、安藤適斎、瀧口向陽と続く一派があった[10]。次に（二）朱子学派であり、頼山陽を頂点として新妻文沖、甲斐土幹、甲斐文哲、白石立敬、牧文吉、片寄源蔵らがおり、また（三）陽明学派には佐藤一斎、国松佐一郎、内田耕助が名を連ねていた[7]。帆足万里、安井息軒はこの日向の地では名の知れた陽明学派の儒学者であった。さらに（四）皇学派として本居太平、武石道生、樋口種実、安藤通故が有名である。医薬を学ぶものはまず幕府の御用学問であった儒教を必須とし、四書五経はもとより医は仁術なりとの考えをたたき込まれた。藩医は世襲で後継者は藩に儒医または古医方

への研修、留学をへて藩医見習そして、時をへて藩医となった。一方、好学のものは師を求めて上京し、赦免状を得て帰国後、民間医として開業した。まさに正庵は後者にあたると考えられる。

ここで晩年薬を売って生活をしたとのこと「茅屋三間鬻薬自業・・・」故、この時代の薬とはどんなものであっただろうか。図―3においてみられる同時代に生きた、貝原益軒(1630－1714)の残した「用薬日記」[13]の中から処方のいくつかを参考のためにかかげる。最も有名なのが「養栄湯」である。これは「人参養栄湯」ともいい、人参、黄耆、陳皮、白朮、当帰、各一匁、白芍二匁。茯苓、七分半。五味子、遠志、五分。甘草、去桂、地黄、半夏を適宜加えたものである。適応症は疲労、倦怠、食欲不振、貧血、病後の体力低下に用いる。次に「帰脾湯」を記す。脾とは胃のことで精神不安、不眠に用いた。処方内容は「人参、白朮、黄耆、茯苓、龍眼肉、当帰、遠志、酸棗仁、木香、甘草」とある。

まとめ

渡邉正庵（1631-1699）は延岡に生をうけ京都にて儒学、医学を修め、帰郷後、時の藩主有馬康純、永純に仕えると共に私塾を開き門人100人以上を育成した。延岡医学の父と呼ばれる人物である。その生涯は「医は仁」なりとする儒学を根底とするものでその生き方には医祖といわれるとふさわしい生涯であった。

延岡の碩学、医祖と呼ばれる所以である。

参考文献

1）山本郁男, 岩井勝正, 井本真澄, 宇佐見則行：日向薬事始め（その１）―秋月橘門とその業績―. 九州保健福祉大学研究紀要 6：277-285, 2005.

2）岩井勝正, 井本真澄, 宇佐見則行, 山本郁男：日向薬事始め（その2）―賀来飛霞と延岡藩での採薬―. 日本薬学会第125年会, 東京, 要旨集4 pp.219, 2005.

3）山本郁男, 井本真澄, 宇佐見則行：日向薬事始め（その3）―延岡の医祖、渡邊正庵とその周辺―. 日本薬学会第126年会, 仙台, 要旨集4 pp. 213, 2006.

4）小池初雄：延岡医祖　渡辺正庵. 日州医事 2月号第426号：22-23, 1985.

5）渡部宗男：日向延岡医祖 渡邊正庵. 延岡市立図書館編, 宮崎, 1992.

6）渡辺博史, 成迫平五郎, 安本潤一：延岡の史跡と文化財. 延岡市教育委員会社会教育課, 延岡, pp.22-23, 1987.

7）石川恒太郎：延岡藩の教育：宮崎県地方史研究紀要第３輯. 宮崎県立図書館, 宮崎, pp. 1-8, 1977.

8）日本人名大事典　1. 平凡社, 東京, pp. 311, 317, 1986.

9）武田醉霞：渡邊正庵翁の墳墓に就て. 考古学雑誌 1 (12)：821- 826, 1911.

10) 甲斐幹文：「渡邊正庵の墓」：郷土展望. 第11号, 夕刊ポケット新聞社, 延岡, pp.23-25, 1978.

11) 松田仙峡：延岡先賢伝. 藤屋印刷所, pp.5-7, 1956.

12) 松田仙峡：延岡教学三百年史. 延岡教学三百年史刊行会, 延岡, 1955.

13) 貝原益軒：「用薬日記」. 宝永4年（1707）.

14) 松田仙峡：延岡金石文集（1）. pp.3-4, 1966.